

第 61 回コンパス薬局スキルアップ勉強会

2016.10.20 近藤

『ラコール NF 配合経腸用半固形剤について』 大塚製薬工場 村上さん

参加者 作佐部、佐藤（直）、小西、友定、佐藤（綾）、生越、阿部、梅津、伊藤、近藤

経腸栄養を行う際に、従来の液状の製剤（ラコール NF 配合経腸用液等）を用いる場合、投与に長時間を要する点や、胃食道逆流による誤嚥や瘻孔からの漏れ、下痢などの合併症が問題になっていたが、胃の機能が残っている患者において、胃の貯留能、運動機能を利用した半固形状の経腸栄養剤を投与することで、短時間の投与の実現と合併症予防ができると考えられている。これまで、寒天や増粘剤を加える方法で半固形状にする方法がとられることがあった。国内初の経腸栄養剤の製品自体が半固形状であるラコール NF 配合経腸半固形剤は、より利便性も上がり患者と介護者の負担軽減にもつながることが期待される。

効能又は効果（抜粋）

経口的食事摂取が困難な場合の経管栄養補給に使用する。

用法及び用量（抜粋）

通常、成人標準量として1日1200～2000 g を胃瘻よりいないに1日数回に分けて投与する。投与時間は100 g あたり2～3分とし、1回の最大投与量は600 g とする。

特徴

- ・ 経腸用液と比べ、添加物としてアルギン酸とカンテン末を加え半固形剤にしている。水分量は経腸溶液よりも9%少ない。

- ・ 投与経路が胃瘻に限定されている

禁忌として「胃の機能が残存していない患者」との事項が経腸用液の禁忌事項と照らし、加えられている。（経腸用液の投与経路は経鼻チューブ、胃瘻、腸瘻より胃、十二指腸、空腸に投与とされている。）

- ・ 投与時間が短縮できる

経腸用半固形剤では100 g あたり2～3分とあるが、対して経腸用液の場合、経管投与においては12～24時間かけて投与とある。

副作用

第III相比較試験(検証的試験)の安全性評価対象56例のうち副作用発現例数は18例(32.1%)、副作用発現件数は27件。その内訳は消化器系の副作用が下痢10例(17.9%)、腹部膨満感1例(1.8%)、便秘1例(1.8%)、悪心1例(1.8%)であり、その他の副作用がALT(GPT)増加3例(5.4%)、AST(GOT)増加2例(3.6%)、血中カリウム増加2例(3.6%)、血中ナトリウム減少2例(3.6%)、白血球数増加2例(3.6%)、低ナトリウム血症1例(1.8%)、誤嚥性肺炎1例(1.8%)、血中クロール減少1例(1.8%)。

考察

経腸栄養はそれを必要とする患者には生命維持のために欠かせないものである。その投与する頻度や時間は患者本人や介護者の生活に直結した問題になるため、半固形剤が従来の液状栄養剤に比べ短時間での投与が可能になることは、生活時間自体に融通が利くこととなり、リハビリの時間が設けることが可能になるなど、メリットは大きい。それに加え、誤嚥性肺炎や下痢などの合併症を防ぐことができるのであればさらにメリットがある。

今回の勉強会においては、投与の方法のデモンストレーションもあり、短時間の投与が可能とはいえ、アダプタやシリンジにより必要な摂取量を投与するには手技の回数もかかり、その手間を垣間見ることができた。栄養剤やその投与方法の特徴を把握し、それぞれの患者の背景により選択を提案することは、今後増加すると見込まれる在宅医療において必要なスキルと感じた。

(デモンストレーションの際に紹介のあった器具は①専用アダプタ及び加圧バッグ、②専用注入器、③カテーテルチップシリンジ)